4）ISS からみた外傷死亡例の検討

山田 智晃・林 侃
関 利明・八木 和徳（新潟市民病院 整形外科）
高橋 一雄
本多 拓・広瀬 保夫（同 救急救命センター）

【対象】過去5年間に救命センター入院後死亡した外傷例58例.【方法】外傷の重症度を ISS（Injury Severity Score）を用いて評価・検討した.【結果】受傷原因は交通外傷によるものが67％と最多であり，頭部外傷のため脳外科入院となったものが全体の57％を占めていた ISS の最小値は4，最大値は75であった．また平均値は31と低値で，これは死亡例の半数以上を占める脳外科入院例で脳挫傷等，頭部単独重症外傷例が多数ありその ISS 値が25～30の間に集中しているためであった．しかし多発骨折に頭頸部・胸腹部外傷を伴い整形外科入院となった重症多発外傷のうち生存例16例について ISS 平均値を求めると26であり，ISS は外傷重症度の良い指標となりうると考えられた．ISS の問題点として，各身体区分についての複数損傷が考慮されていない点や今回の調査のように頭部単独外傷例が多数を占めるような場合に低値になる点などがあげられる．このような点を考慮して新たな外傷指数の考案が試みられているが現時点では ISS を用い評価するのが実際的であろうと考えられる．

5）新潟市民病院での最近10年間における腎外傷の臨床的観察

中村 章・大沢 哲雄（新潟市民病院 泌尿器科）
高橋 英祐

最近10年間（1982～1991）に当院で扱った腎外傷について検討した．患者総数は56例（男40，女16）であった．救命救急センターが開所してから患者数が急増した．年代別分布では10代の患者数が特に多く，24例（42.9％）を占めた．原因別にみると交通外傷が23例で最も多く，スポーツ外傷8例，職業性外傷5例となっており，その他高所からの転落10例，歩行時の転倒7例，腹部を蹴られたもの3例などがあった．合併損傷では骨折（主に肋骨）12例，肝損傷7例，脾損傷5例などが多かった．治療法では，安静・対症療法のみが28例（50.0％）であり，手術を行ったものが27例（48.2％）であった．腎摘除術13例，腎損傷部の縫合6例，腎部分摘除術4例，腎切石・損傷部縫合1例，断裂血管（異常血管）の結紮1例，腎盂縫合1例であった．来院時すでに一般状態が悪く，死亡した例が1例（1.8％）であった．

6）小児外傷性腹部損傷の経験

金田 聡・岩渕 眞
大沢 義弘・内山 昌則
松田由紀夫・内藤 真一
丸田 智章・林 光弘（新潟大学小児外科）

1）交通事故により受傷した7歳女児の小児多発外傷症例に対し，複数科で連携し，治療にあたり救命し得たのでこれを報告した．2）本症例の脾破裂の破裂部に対してマットレス縫合を行い，脾温存をすることができた．3）過去11年間に当科にて経験した小児腹部外傷24例について検討した．性別は，男児18例，女児6例で，年齢は5歳以下が14例と最も多かった．原因は交通事故が12例と半数を占め転倒が6例で続いた．4）損傷臓器は肝が8例と最も多く，脾3例，腎，膵，十二指腸穿孔が各2例であった．打撲のみで明かな臓器損傷を認めない症例が8例あった．5）治療は手術が13例，保存的治療が11例で，術中死亡が1例であった．6）小児外傷は軽度の外傷でも臓器損傷をきたしやすい反面，症状・所見を示さない場合がありその診断には注意を要する．

7）咳嗽により四肢麻痺を呈した頚椎硬膜外出血の1例

河路 洋一・勝見 裕
平野 明・勝見 政寛
山本 康行・長谷川淳一（新潟中央病院 整形外科）
坪川 直人・瀬川 弘之
本間 隆夫（新潟大学整形外科）

咳嗽により発症し腰椎穿刺により急激に四肢麻痺を生じた稀な1症例を病理学的にもその原因を確認し得たので報告する．

症例：43歳，男，起床時咳をした後突然項部より両肩に激痛が出現した．神経学的な異常所見は全くなかったが，腰椎穿刺をしたところ，直後より四肢の脱力が出現，約10分後にほぼ完全な四肢麻痺に陥った．緊急 MRI で，脳の嵌頓ヘルニアはなく C2～Th2 に大きな硬膜外血腫を認めた．en bloc laminectomy により椎弓内面に錯綜する異常血管網を認め，病理組織学的には硬膜外動静脈奇形（AVM）であった．考察：腰椎穿刺によって生じる神経学的合併症は，脳の嵌頓ヘルニアがよく知られているが，頚部の硬膜外血腫が四肢麻痺を生じることもある．その原因として Queckenstedt test による静脈圧上昇，疼痛による動脈圧上昇，髄液圧急減などによる出血が考えられる．腰椎穿刺に伴うこのような麻痺に遭遇したら，本疾患をも疑って検査を進める必要がある．